

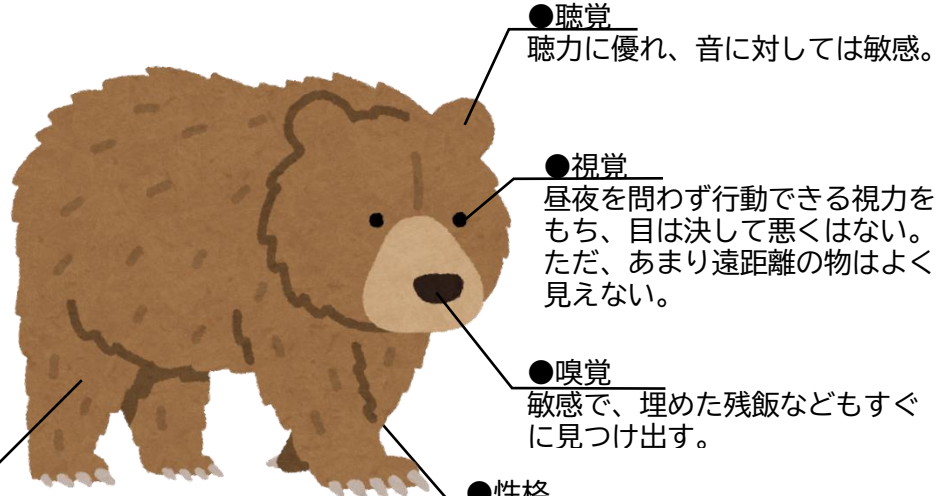
1 ヒグマの生態

●オス

体長:2.0m弱
体重:約150~400kg

●メス

体長:約1.5m
体重:約100~200kg



●運動能力
臨機の動作は非常に敏感。その気になれば一撃で牛を倒すこともできる。

2 ヒグマの1年

冬眠明け	子グマの子離れ繁殖期				餌が少なく農業被害を起こすことも		冬眠準備食いだめ			冬眠・出産		
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
ミズバショウ、フキ、横エビ、エゾシカなど	アリ、フキなど				農作物牧草		コクワ、ヤマブドウ、サケ、マスなど			出産後は母乳のみで子育てを行う		

※食いだめの餌の状況によって冬眠の開始時期が異なる。

3 ヒグマの暮らしと行動範囲

- オスは近親交配などを避け、母グマから遠く離れた場所へ移動する。
そのためオスは子育てには一切参加せず、繁殖期以外は、オスとメスは別々に暮らす。
- 繁殖期にオスは、行動範囲を広げて山林を動き回り、複数のメスと交尾をする。
- 子グマを連れてきたメスは繁殖に参加しないため、オスはメスと交尾するために子熊を殺してしまうことがある。この時期の子連れメスは、オスの動き回る山林を避けて市街地付近に出没することがある。
- ヒグマは個体ごとに、それぞれの行動圏(行動範囲)が決まっており、行動圏の広さは、オスが数百 km^2 、メスが数十 km^2 。オスは繁殖のためにメスを探して歩きまわるため行動範囲が広がる。
また、地域や餌資源の量によって行動範囲が変わる。餌資源の多い地域では行動圏は狭くなる。
- ヒグマは、美味しくて手に入りやすい食物があるとしつこく執着する。普通は人を避けて暮らしているが、人間の食料やゴミに餌付くと大胆不敵な行動をするようになることが多い。
- 母グマは、普通1~3頭の子を産む。母グマは、子グマを守るために攻撃的になる。

4 日常の指導と備え

(1)職員における正しい知識等の習得

○校内研修等において、次の事項について研修を行う。(4月)

- ①ヒグマの生態について
- ②日頃からの生徒指導と備え
- ③ヒグマの目撃情報があった場合の対応
- ④ヒグマに遭遇した時の対応

(2)生徒指導と学習機会の創出

○次の事項について、生徒指導及びヒグマに関する学習を行う。(5月)

- ①ヒグマの生態について
- ②ヒグマに遭遇した時の対応

(3)情報収集及び連絡体制の構築

○学校周辺においてヒグマの目撃情報があった場合の連携体制を構築する。

(※「5 目撃情報があった場合の対応」を参照)

(4)教育環境の整備

○家庭や地域、市教委、関係機関・団体と連携・協力のもとで、日頃から次の環境整備を行う。

- ①学校周辺の草刈り。
- ②食べ物や飲み物を屋外に放置しない。
- ③屋外にごみを放置しない。(学校周辺のごみ拾い)
- ④通学路における危険個所の把握と巡回。

5 目撃情報のあった場合の対応

○学校周辺において、ヒグマの目撃情報があった場合は次のとおり対応する。

- ①警察署から直接情報提供があった場合は、市教委に連絡し情報の確認と対応について指示を仰ぐ。
- ②市教委から情報提供及び対応の指示があった場合は、生徒等の状況や関係機関の指示を踏まえ対応を決定する。
- ③必要に応じて小学校と情報共有し対応を合わせる。
- ④生徒が学校に居る場合は、屋外に出ないように注意を促す。
- ⑤保護者に次の対応をマチコミメールで依頼する。

ア)登下校前:保護者の送迎または通学路を変更して登下校するよう依頼する。その際、渚滑地区見守り隊及び交番に連絡し、危険な個所での見守りやパトロールを依頼する。

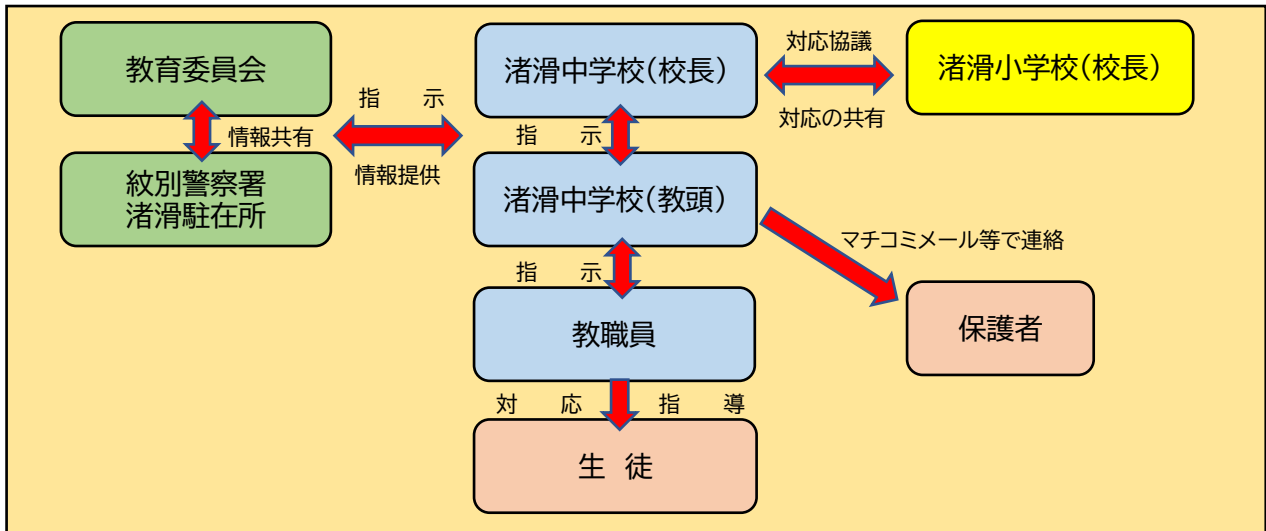
イ)登下校中:渚滑地区見守り隊及び交番に連絡し、危険な個所での見守りやパトロールを依頼すると同時に、教員による通学路の巡回及び生徒の安否確認を行う。

ウ)対応の目安は、生徒が住む地区内での目撃情報であること。

エ)対応の解除:目撃情報があった日で、その後に情報が無い場合に解除する。

⑥関係機関(市教委、警察署等)からタイムリーに情報収集を行い、ヒグマの行動について注視する。

6 連絡体制



7 ヒグマに遭遇した時の対応

〇万が一、ヒグマに遭遇した場合は、次のとおり対応するよう日頃から生徒に指導する。

遠くにヒグマを見つけたら…

落ち着いて状況を判断する。
ヒグマがこちらに気付いていないなら、その場から静かに立ち去る。

ヒグマがこちらに気付いたら…

ヒグマの移動する方向を見定めながら、静かに立ち去る。あわてることは事故につながる。
まずは落ち着いて普通にしていれば、ほとんどのヒグマは立ち去るはず。

それでも近づいてきたら…

ヒグマから視線を離さない。ヒグマの動きを見ながらゆっくりと後退する。

襲い掛かってきたら…

北米では、首の後ろを手で覆い、地面に伏して、頸部、後頭部への致命傷を防ぐ方法を勧めている。道内の死亡事故でもこの部分が致命傷となっている事例がみられる。攻撃を止めるためには、熊撃退スプレーが有効。

走って逃げるのは自殺行為…

ヒグマを刺激しない。まず落ち着いてゆっくりと後ずさりしてヒグマから目を離さず、その場から離れる。

子熊の後ろに必ず母熊あり…

子グマを見つけたら絶対に近づかず、すみやかに立ち去る。
母グマは子グマを守ろうと攻撃してくる。

- 登下校時の場合は、近くの建物に避難し、避難先から学校に連絡をする。
- 休み時間や体育の時間などで屋外に居る場合は、活動をやめ、声を出さずに屋内に避難する。
その際、教職員は、生徒の避難を誘導する。
- 教職員は、全生徒がいることを確認し、玄関及び窓を閉め施錠を行う。
- 学校(教頭)は、クマの発生時間、大きさ(体長)、移動方向を観察し把握した後、警察に通報する。

【参考】

○ヒグマの生態・習性／札幌市

<https://www.city.sapporo.jp/kurashi/animal/choju/kuma/seitai/index.html>

○ヒグマを正しく知ろう／環境省自然環境局知床国立公園

<https://www.env.go.jp/park/shiretoko/guide/sirecoco/bear/>

【協力】

公益財団法人 知床財団